

## 出雲の国の神話

この映像では、8世紀に朝廷のために編纂された、地域の地理・風習・説話を記録した「出雲国風土記」の中から、いくつかの神話を紹介しています。

物語は、「国引き」の神話で始まります。ある日、八束水巨津野命（ヤツカミズオミズヌノミコト）という神は、出雲の地が狭すぎると考えます。海の向こう側を見渡して、土地に余裕のある場所を見つけ、巨大な鋤（すき）でいくつもの塊を切り分けます。その塊を太いロープで出雲の海岸に引き寄せ、杭に結びます。これらの杭はやがて、三瓶山（出雲の南西）と大山（鳥取県）の山となり、引っ張られた土地が今の島根半島です。

もう一つの神話は、サダノオオカミの誕生を描いたものです。サダの母であるキサカヒメノミコトは、陣痛が始まると海岸の洞窟に引きこもりましたが、その際に金の弓を失ってしまいます。弓が戻ってくることを祈った後、キサカヒメは波に沿って弓が彼女に向かって流れているのを見ます。彼女はそれを手に入れて、洞窟の壁に矢を放ち、海に通じる通路を作りました。この通路を通るとき、旅人は大きな声で叫ばなければ、突風で船が転覆すると言われていました。

また、この映像には「タマヒメノミコトとサメ」の物語があります。海岸にタマヒメノを見つけたサメは、その美しさに心を奪われます。サメは愛を告げるために、川を泳いで内陸へと向かいます。サメの姿に恐れをなしたタマヒメノは、岩で川をせき止めてしまいます。この事件の舞台となった出雲の東南にある玉石混じりの溪谷は、「恋に焦がれたサメ（ワニのしたふ）」にちなんで名付けられました。その後、発音が変化し、現在の「鬼の舌震（おにのしたふるい）」となりました。